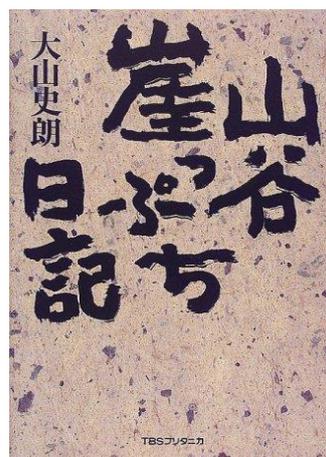


山谷崖っぷち日記

大山 史朗

TBS ブリタニカ、2000年
(2002年文庫化、角川書店)



写真は amazon

本を読む機会は少なくないつもりだが、ほんとうに面白い本は年に10冊もあればいいところで、厳選して読んでも、その確率はおそらく数十冊に一冊といったところだろう。

そうしたAクラスの本もこれまでは読んで終わりだったが、それでは勿体ないと考え、自分の心覚えも兼ねて、簡単にご紹介していこうと思います。

「山谷崖っぷち日記」の著者・大山史朗氏は、1947年生まれ。69年大学卒業ののち、サラリーマン生活、工員生活などを経て、87年より山谷で建設作業員として生活していました。本書の内容をAmazonでは次のように紹介しています。

《「つまるところ、私は人生に向いていない人間なのだ」大学卒業後、会社勤めに挫折し、釜ヶ崎で労務者になった著者は、そう結論づけて山谷にやって来た。たたみ一畳のベッドハウスに泊まり、現場仕事をし、「山谷」という奈落に生きる人間たちの生活と心根をつぶさに観察していく。苛酷な生存競争の場を静謐な文体で綴った現代の「方丈記」であると全選考委員に絶賛されて第九回開高健賞を受賞。》

筆者が本書とはじめて出会ったのは、貧困問題に関する本を集中的に読んだときの一冊としてでした。

多くの本がジャーナリストや研究者といった貧困者以外の人によって執筆されている中で、この本は貧困者自身によって書かれたという点で極めて珍しい本です。ここで山谷の住人＝貧困者とみなすことには本当は問題があるかもしれませんが、一般的にはそうみなされているとあっていいでしょう。加えて本書には、貧困問題をマクロな社会問題としてではなく、ミクロな個人的問題、あるいは対人問題として捉えているという他書にはない特徴があります。それは貧困問題を外面的に捉えるのではなく、内面的に捉えるということでもあります。

「山谷崖っぷち日記」は、山谷のベッドハウスでの日常生活という表面的な記述から始まって、次第に内面的、思索的な事柄に及んでいきます。その構成は、次のとおりです。

山谷のドヤ街でベッドハウスの住人になった
昭和三十年代なら私はいきられなかつたらうと思っていたのだ
塚本さんがいなくなった
身体の面倒を見なければならぬことに気づき、散歩を始めた
「あなた、可哀相な人」と外国人就労者に言われた
人生を総括して少しもおかしくない年齢になった

後半の内面的、思索的な記述から印象深い箇所を幾つか抜き出してみましよう。

山谷における重要な階級差の境界は、住居の有無（筆者注：簡易旅館宿泊者か路上生活者かの違い）ではないと思う。では、それは何かといえば、私は食べ物を漁るか否かだと思う。

住まいがないのと、食べ物を漁るのとでは、明らかに惨めさの程度が違うのである。……山谷において真のホームレスというべき人々とは、食べ物を漁る人々なのだと言っているのではないか。

山谷の真のホームレスが、完全に労働市場から排除された老人たち（筆者注：おおむね60歳以上）であるのは、いかなる山谷の住人とはいえ、この最後の転落に直面すれば必死の抵抗を示すからだと思われる。（pp114）

自分たちがいいこと（救済活動）をするための対象として、山谷住人が彼ら基督教ボランティアたちに依存しているよりもはるかに深い意味で彼らは山谷住人に依存しているのだが、この有名な基督教おばさんたち（筆者注：炊き出しの食べ物目当てに行列に並ぶ人々に向かって、布教というよりも露骨な説教を垂れ、態度がなっていない人たちの横っ面を張り飛ばすという噂ある人物）には、このことについても自覚がなさすぎるように思われる。……基督教ボランティアの方では、山谷住人という困窮者の存在を、自らの信仰上の救済証明のための欠かすことのできぬ人々として、いつまでも必要としているはずなのだ。

その活動のたたずまいに、いいことをしていることについての羞恥心が感じられないのは、私には致命的だと思われる。（pp147）

……大都市の路上でホームレスがゴミ箱を漁っている傍らを、リッチなエグゼクティブが運転手付きの高級車で通り過ぎてゆく。斎藤さんはこのような光景を見れば、額の血管をみるみる筋ばらせていくようにして正義感を膨張させていくのであった。私ならむしろ、

高級車のエグゼクティブが担っているであろう責任の大きさに想いをはせ、あんな立場にはなりたくないなあと感じるだろう。ゴミ箱を漁るような生活が、人々からの視線の問題さえクリアできればどんなに気楽なものかが想像されるから、これがそれほどにも悲惨の極みとしては私には感じられない。何よりもこのような貧富の格差が露骨に誰の目にも入って来るような社会は（ゴミ箱を漁る人々が収容所に送られたりはしない社会は）、価値の多様性が容認された社会でもあるはずである。何を（究極の）不幸と感じるかは、その人の価値観によって異なる。ある種の不幸のみは万人にとっての絶対的な不幸だという決めつけは、やや単純であり、^{おきな} 稚い。(pp172-173)

山谷住人の陋劣さは、一般市民社会の住人の陋劣さよりも洗練と多様性に欠け、はるかに単純で露骨だった。無知と卑屈と傲慢の三位一体を体現したような人々とは、腐るほど出会ってきた。知識それ自体にはさほどの意味はないのだろうが、知識を手に入れる過程で身につく教養なるものは、なるほど重要なものなんだなということが、これら三位一体を体現した人々と接触するたびに痛感させられるのだった。

無知でありながら、性格の力のみで己の陋劣さを焼き切ったというふうの人々には会ったことがない。……

無知であることが恥と陋劣さにつながらないためには、どれほど例外的、超人的な意志力を必要とするかに想いを致せば、私は、無知は恥と陋劣さの母胎だ、と言い切ってしまいたい気持ちにかられる。(pp176-177)

「山谷崖つぶち日記」を読むと、貧困に関する本の多くには共通した特徴があることの気がつきます。それは、欠点といってもいいと思います。

第1に、それらの著者は、ジャーナリストにても研究者にしても、ほとんどすべてが成功者の側にいるといっていいいでしょうが、こうした著者たちは、善意からでしょうが、「自分たちは貧困者の牧民官であり、貧困者が自分たちの側に近づくことが望ましいことである」という前提に立っているように思われることです。露骨に言えば、貧困者に対する自己の優越性を前提にしているのです。おそらく、この「構え」が一部の貧困者には耐えがたいのではないのでしょうか。著者の多くは、それに気づいていないか、あるいは気づいていても問題とは思わないのでしょうか。これの極端な例が、上記引用にある「キリスト教おばさん」でしょう。

第2に、こうした著者たちは、多くの場合、統計的思考法を採ることです。つまり多数の事例を集めてきて、そこから一般的傾向として何が言えるかを考えるわけです。こうした思考法が使われると、個々の貧困者は唯一性を剥奪されて、数多くの事例の一つに矮小化されてしまいます。これも貧困者にとっては、耐えがたことではないのでしょうか。

もちろん、こうした構えや思考法がすべて不要であるとか、無効であるといっているわけではありません。むしろ、貧困問題解決への正攻法のように思われますが、併せて必要

なことは、「成功者に少しでも近づくような生き方」以外の道を貧困者が選択できる複数性を持つことのように思われます。もっとも、筆者のこうした言い方にも、上記した「構え」と同じものが入り込んでいるのですが。

「山谷崖っぷち日記」は、語ることがないと思われていた「サバルタン」自身が語ったというだけでも大変に価値のある本といえるでしょう。200 頁弱で簡単に読める本なので、一度は読んでおくことをおすすめします。

意見に係る部分は、筆者個人の見解です。

橋本 武（一般財団法人日本開発構想研究所・研究主幹）